こんにちは。去年の夏、インターンシップのために、宮城県の仙台市に二か月ぐらい住んでいました。そこで、自然の美しさと人のやさしさにふれただけではなく、多くの苦しみを経験した仙台の歴史にも感動しました。ひとことで言うと、仙台のイメージはかこにこだわらず、前だけみて進もうとしている町だということです。それで、この場を借りて、「森の都」、仙台のいろんなところを歩いたある日の私の印象をみなさんと共有したいとおもいます。

まず、仙台のシンボル、丘の上にある青葉城に行くと、まだ木の葉に朝露の雫が光り、この城を作った伊達政宗の銅像が立っています。丘の上から伊達政宗が下にある「森の都」を見守ってるようです。

昼間は、中心街のケヤキ並木にいきました。町の復元ために植えられたケヤキの木陰は通行人を真夏の日差しから守ります。少し歩くと、毎年ここで行われるＪＡＺＺの音楽祭をやっていました。その木、そのゆったりとした雰囲気はまたこの都の強さの証しでもあると思いました。戦争と災害の後でも歩みを止めなかった町は今こうやって賑やかになっているのです。

夜が森の都をおおうころ。牽牛と織女、二つの星の再会を祝うように、七夕まつりの飾りは輝いています。商店街のアーケードでその飾りは風と共にながれます。アーケードの終わりの公園で披露されている伝統的な踊り「スズメ踊り」はいろんなことを語りかけてきます。お祝い、願い事、そして永遠に続く強さと希望。

このスピーチで、仙台の魅力が少しでもわかってもらえたら、うれしいです。わたしはもう一度、あの町に行きたいと思っています。